

第 7 章

中央アジアのロシア人

第 1 節 ロシア帝国、ソヴェト連邦期の中央アジアの ロシア人

ロシア人は、1989年には中央アジアの 5 共和国の総人口4914万7616人のうち951万9958人で19.4%を占め、ウズベク人33.7%に次ぐ第 2 の民族であった(表 1)。旧ソ連全体のロシア人の6.6%がこの中央アジアに居住していたことになる。このような状態は、19世紀後半にこの地域がロシアの植民地になって以後、特にソヴェト政権の70年間に形成されたものである。

1. ロシア人による中央アジア征服と革命

イヴァン雷帝が、中央アジア諸民族と同じトルコ系ムスリムのタタール人のカザンを陥したのは1552年、イェルマークがシビル・ハン国の首都シビルを占領したのは1582年であるが、ロシアが中央アジアを征服したのははるかに遅く19世紀後半である。それまで、ここにロシア人はほとんどいなかったわけである。

すなわち、ピョートル大帝(在位1682~1725年)は、インドへの道を開こうとして中央アジアに兵を送り失敗したが、このころ東シベリアのオムスクを、少し後にその南で後に中央アジアの玄関となるオレンブルクを建設して通商の拠点とした。19世紀に入ると、ロシア軍はカザフスタンのステップを南下

表1 中央アジア民族

	ソ 連	中央アジア 5カ国	カザフスタン
	285,742,511	49,147,616	16,464,464
カザフ	8,135,818	7,479,429	6,534,616
キルギス	2,528,946	2,483,148	14,112
ウズベク	16,697,825	16,539,762	332,017
トルクメン	2,728,965	2,683,416	3,846
タジク	4,215,372	4,168,161	25,514
タタール	6,648,760	977,352	327,982
クリミア・タタール	271,715	202,111	3,169
トルコ	207,512	178,158	49,567
ウイグル	262,643	259,716	185,301
ロシア	145,155,489	9,519,954	6,227,549
ウクライナ	44,186,006	1,234,417	896,240
ベラルーシ	10,036,251	237,682	182,601
ドイツ	2,038,603	1,135,741	957,518
ユダヤ	1,378,344	101,613	18,492
中央アジア・ユダヤ	36,152	34,461	795
朝鮮	438,650	321,089	103,315

(出所) Вестник статистики, октябрь, ноябрь,

し、1854年ヴェルノエ要塞（現在のアルマトゥ）を建設した。また、オレンブルク総督ペロフスキーは、アラル海からシルダリア沿いにコーカンド・ハン国を攻め、1853年に要塞アクメチェット（現在のクズイルオルダ）を占領した。ロシア軍は、次いで1865年にタシケントを占領し、1867年にここにトルケスタン総督府をおき、中央アジア支配の拠点とした。コーカンド・ハン国は1876年にフェルガーナを奪われて滅び、その領域はロシアの直轄領となった。ブハラ・ハン国は1867年、サマルカンドを失ってロシアの保護国となり、ヒヴァ・ハン国も1873年に保護国となった。

その後中央アジアは、発展しつつあったロシア綿工業の原綿モノカルチャー植民地となる。この地域のオアシスは日照と水に恵まれ綿の栽培に適しており、アメリカからの綿花輸入が南北戦争で激減したこともあって、アメリ

構成表 (1989年)

(単位：人)

キルギスタン	ウズベキ スタン	トルクメニ スタン	タジキスタン
4,257,755	19,810,077	3,522,717	5,092,603
37,318	808,227	87,802	11,376
2,229,663	174,907	634	63,832
550,096	14,142,475	317,333	1,197,841
899	121,578	2,536,606	20,487
33,518	933,560	3,149	3,172,420
70,068	467,829	39,245	72,228
2,924	188,772	32	7,214
21,294	106,302	227	768
36,779	35,762	1,308	566
916,557	1,653,475	333,892	388,481
108,027	153,197	35,578	41,375
9,187	29,427	9,220	7,247
101,309	39,809	4,434	32,671
5,604	65,493	2,323	9,701
346	28,369	72	4,879
18,355	183,140	2,848	13,431

декабрь 1990, январь, апрель, май, июнь 1991, より作成。

カから導入されたアブランド種綿が普及した。その栽培面積は1888～1915年に7倍近く増え、1915年フェルガーナ州では耕地面積の44%を占めるまでに became。植民地支配は、この地域の農村にロシア人が直接入ることなく、地主（バイ）を通じて行われ、ムスリム農民は二重の抑圧を受けることになる。

カザフスタン東部、キルギスタンなど遊牧民の地域では、ロシア政府は1891年に遊牧地の国家的所有を宣言し、その一部をロシア人、ウクライナ人移住民に分配した。こうして、ステップではロシア人などの農民が居住することになった。

第一次世界大戦勃発後は、穀物や生活必需品の価格の騰貴、戦時追加税や役畜の徴発によって住民の不満が高まっていたが、1916年6月のムスリムを戦時後方作業に徴集する勅令をきっかけにして、7月に中央アジア全域に広

図1 カザフスタン5地域と他の中央アジア4共和国略図



(出所) 木村 [1996, 9] より転用。

がる蜂起が始まった。

中央アジア・ムスリムの解放運動の中核となったのは、実務的な口語教育の普及を通じてイスラム社会を改革し近代化を進めようとしたジャディドと呼ばれるインテリゲンツィアである。ジャディディズムは、汎トルコ主義的傾向を強め、1908年に成功した青年トルコ党の革命の影響を受けた。

綿花は、1898年にタシケントまで通じたザカスビ鉄道によってクラスノヴォツクに、さらにカスビ海、ヴォルガの船便によってモスクワに運ばれた。1906年にはオレンブルクから南下してタシケントにいたる鉄道も開通した。鉄道労働者は大部分ロシア人であった。ロシア革命のとき、ソヴェト政権はこれらのロシア人とこの地域に駐留したロシア人兵士によって担われた。革命後の国内戦も主にロシア人の赤軍と白軍によるものであった。

2. ソヴェト期中央アジアにおけるロシア人

1924年の中央アジア民族的・国家的境界区分によって、ウズベク、トルクメンの2共和国が発足し、ソ連に加盟した。これが、現在の中央アジアの五つの独立国の出発点である。

その前の革命期の政治史については省くが、政権党である共産党は、ほとんどがロシア人の党であったこと、その後原住諸民族の党員を獲得し、基盤を拡大したことを述べておきたい。例えばカザフスタンでは、1924年の段階でも、ロシア人の党員が54.3%で、カザフ人は11.6%にすぎなかった。これは33年にはそれぞれ38.2%、53.1%となる⁽¹⁾。遊牧地域のカザフスタンでは、19世紀半ばに現れたロシア的教養を身につけた知識人が、ウズベキスタンを中心とする灌漑農業地帯では、ジャディドと呼ばれるイスラム改革派が党員の源泉となった。

原住民族全体がソヴェト政権に敵意をもち、バスマチ運動などの反ソ運動を支持し共感をもっていたとは言えない。また、1920年代後半にはソヴェト政権によって実施された土地・水利改革を中心とする変革によって階級構造が根本的に変化した。

ソヴェト政権の下で、過去の地域的、宗教的、王朝的・民族的な同一性は弱まり、新しい民族が生まれた。この民族の形成は、1924年の民族的・国家的境界区分と長期にわたる共産党の幹部による中央集権的な支配と結びついている。この過程は、経済的な改革と工業化、教育の普及、管理者層・科学者技術者層の形成を伴った。都市にはロシア人、ウクライナ人が大量に移住した。表2、表3に全体的状況を示したが、カザフスタンとウズベキスタンにおける特に都市のロシア人人口の増加についてくわしくみてみよう。

カザフスタンのロシア人は、1926年には、128万人（20%）、都市では28万4000人（53%）で、アルマトゥでは4万4000人の90%を占めた。39年には147万2000人（40%以上）、都市だけとった場合には98万7000人（58.4%）となっ

表2 ロシア人比率の推移

	(%)					
	1926	1936	1959	1970	1979	1989
カザフスタン	19.7	40.3	42.7	42.4	40.8	36.7
ウズベキスタン	25.4	11.5	13.5	12.5	10.8	8.3
キルギジア	11.7	20.8	30.2	29.2	25.9	21.4
タジキスタン	0.7	9.1	13.3	11.9	10.4	7.6
トルクメニスタン	8.2	18.6	17.3	14.5	12.6	9.5

(出所) Игрицкий и др. ред. [1996, 120].

表3 中央アジアのロシア人人口の都市、農村比率

	キルギジア		タジキスタン		トルクメニア		ウズベキスタン	
	都市	農村	都市	農村	都市	農村	都市	農村
1959	58	42	87	13	95	5	84	16
1979	69	31	94	6	97	3	93	7
1989	70	30	94	6	97	3	95	5

(出所) Савоскул и др. ред. [1995, 59].

た。戦後はフルシチョフ期の北部における処女地開拓と工業化によって都市、農村両方でロシア人が増加し、59年397万4000人（42.7%）、都市では234万8000人（58%）になり、アルマトゥでは39年16万6000人（72%）、59年33万4000人（73%）であった。カザフスタンではかなりの期間、ロシア人がカザフ人より多かったのである⁽²⁾。

ウズベキスタンのロシア人は、1926年には24万1000人で5.4%であったが、都市だけとった場合は20万5000人、13.6%で、ロシア人の大部分が都市に居住していたことがわかる。39年には72万7000人（11.5%）、都市では51万5000人（35%）、戦後の59年には109万1000人（13.4%）、都市91万3000人（33.4%）となった。中央アジア第1の都市である首都タシケントにおけるロシア人は、39年24万9000人（42.6%）、59年40万1000人（43.9%）で、ここでは住民の半数以上がロシア語人口となった⁽³⁾。

この後1960～80年代には、カザフスタンを除いて、名称民族の人口が増大し、住民構成が著しく変わった。この変化のなかで、30～50%を占める非名

称民族、特にロシア人の問題が重要になってきていたわけである。ロシア人は、キルギスタンでその70%が、カザフスタンで77%が都市住民であるが、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンでは94～97%が都市に住んでいる。ロシア人の側から考えると都市の問題となる。彼らは、原住名称民族とは別に新市街を形成した。

3. ソ連およびロシア共和国におけるロシア人

ソ連解体後の中央アジアのロシア人の問題を考える前提として、ロシアとロシア人の地位と意識の問題を、ソ連全体のなかで考察しておきたい。

ロシア帝国は、皇帝権力、ロシア正教、ロシア語で全土を統一しており、その体制を崩壊させたロシア革命は、単なるロシア人労働者、農民の革命でなく、抑圧されてきた諸民族の革命であった。それが、単なるルースキー（ロシア人の）・リヴォリューツィア（革命）でなく、ロシイスカヤ（諸民族を含むロシアの）・リヴォリューツィアと言われるゆえんである。

ロシア人はロシアばかりでなく、ソ連全土に居住しており、ロシア以外の共和国のロシア人は2530万人にのぼった。比率ではバルト海沿岸のラトヴィア（34.0%）、エストニア（30.0%）が大きいが、絶対数、比率両者においてウクライナ（1135万5600人、22.1%）、カザフスタン（622万7500人、37.8%）に特に多い。これらのロシア人は、各共和国で、共産党の幹部として、政府と党の重要な地位を占めたばかりでなく、工場の管理者、工業労働者、技術者として活動し、その人口比率よりはるかに大きな役割を果たした。彼らは、各共和国の首都をはじめとする都市で特に多くを占め、ロシア語が広く使用されたため、教育、研究の分野でも有利な地位にあった。彼らは、モスクワのソ連政府および共産党本部を頂点とする機構の拠点を握り、ソ連全体の政治、経済、文化を支配し、動かしてきたのである。

ロシア人はこのように、ソヴェト体制の下では、党や政府の地位、言語的な特権、文化的な便宜を、ソ連全体で享受していたが、社会主義建設のため

諸民族を指導し、代表する者として、ソ連全体を彼らの領土のように考えがちであった。これを象徴するのは、革命後地名などのソヴェト化が行われたが、それがロシア化を含んでいたことである。例えば、キルギスタンの首都は、ピシベクから革命期に活躍したロシアの将軍の名をとってフルンゼと変えられ、タジキスタンのドシャンベはスタリナバードとされた。その他革命家の名が多くの都市につけられ、コムニズム、ドルージバ（友好）など社会主義的なロシア語も地名につけられた。ソ連共産党にも、ロシア共産党という組織は特になかった。

このように、ロシア人にとってロシア共和国は、他の共和国がその民族にとってのもつ意味と違っていた。ソ連が解体したとき、ロシア人は他の共和国内部のロシア人が集中する地域での自治を要求しようとした。それは、カザフスタンの北部および東部、ドニエストル川以東のモルドヴァ、エストニア東北部、ウクライナ東部、南部、クリミアで、ドニエストル東部ではロシア軍による支援を得た。ロシア人・名称民族以外の諸民族が集団的な公的権利や領土的自治を得たいという意識は、民族自決という原則を、民族的共和国などの自治単位の創設によって保障しようとしたソヴェトの民族政策によって形成されたものである。前述したようなロシア人の要求は、名称民族自身の政治と領土の一元的な支配を要求する共和国の民族的エリートに挑戦することになり、脅威とみなされ、非難されることになった。

繰り返すと、ソ連解体前ロシア人は、ソ連全体を自分たちの活動する舞台、生活と労働の領土的・制度的空間と考えてきた。したがって自分たちの国がロシア共和国の領土や制度だけであるとは思っていなかった。そのためロシア共和国はウズベク共和国がウズベク人の共和国としてもっていたようなロシア人のための制度を欠いていたのである。このことは、ロシア共和国内部でも同じであった。

表4は、ロシア共和国内の自治的民族構成体のなかでのロシア人と名称民族の人口とその比率を示したものである。これで見ると、これらの構成体の大部分ではロシア人の比率が最も大きく、名称民族は意外に少なく、ロシア

表4 ロシア連邦の共和国等のロシア人

(単位:人)

	ロシア人	%			%
アディゲア共和国	293,640	67.96	アディゲ人	95,439	22.09
アルタイ共和国	115,188	60.36	アルタイ人	59,130	30.99
バシコルトスタン共和国	1,548,291	39.27	バシキール人	863,808	21.91
ブリヤート共和国	726,165	69.94	ブリヤート人	249,525	24.03
ダゲスタン共和国	165,940	9.21	アヴァール人	496,077	27.53
カバルダ・バルカル共和国	240,750	31.95	カバルダ人	363,494	48.24
			バルカル人	70,793	9.39
カルムイクア・ハリムグ・タングチ共和国	121,531	37.67	カルムイク人	146,316	45.36
カラチャイ・チェルケス共和国	175,931	42.40	カラチャイ人	129,449	31.19
			チェルケス人	40,241	9.70
カレリア共和国	581,571	73.60	カレリア人	78,928	9.99
コミ共和国	721,780	57.70	コミ人	291,542	23.31
マリイ・エル共和国	355,973	47.51	マリ人	324,349	43.29
モルドヴィア共和国	586,147	60.83	モルドヴァ人	313,420	32.53
サハ(ヤクーチア)共和国	550,263	50.30	ヤクート人	365,236	33.38
北オセチア共和国	189,159	29.91	オセッット人	334,876	52.95
タタルスタン共和国	1,575,361	43.26	タタル人	1,765,404	48.48
トゥイヴァ共和国	98,831	32.03	トゥヴァ人	198,448	64.31
ウドムルト共和国	945,216	58.87	ウドムルト人	496,522	30.92
ハカシア共和国	450,430	79.46	ハカス人	62,859	11.09
チェチェン・イングーシ共和国	293,771	23.12	チェチェン人	734,501	57.82
			イングーシ人	163,762	12.89
チュヴァシ共和国	357,120	26.69	チュヴァシ人	906,922	67.78
ユダヤ人自治州	178,087	83.19	ユダヤ人	8,887	4.15
アギン・ブリヤート自治管区	31,473	40.77	ブリヤート人	42,362	54.88
コミ・ペルミヤーク自治管区	57,272	36.13	コミ・ペルミヤーク人	95,415	60.19
コリヤーク自治管区	24,773	62.03	コリヤーク人	6,572	16.45
ネネツ自治管区	35,489	65.83	ネネツ人	6,423	11.92
タイムイル自治管区	37,438	67.09	ドルガン人	4,939	8.85
			ネネツ人	2,446	4.38
ウスチオルダ・ブリヤート自治管区	76,827	56.54	ブリヤート人	49,298	36.28
ハンティ・マンシ自治管区	850,297	66.31	ハンティ人	11,892	0.93
			マンシ人	6,562	0.51
チュコト自治管区	108,297	66.06	チュクチ人	11,914	7.27
エヴェンキ自治管区	16,718	67.50	エヴェンキ人	3,480	14.05
ヤマロ・ネネツ自治管区	292,808	59.17	ネネツ人	20,917	4.23

(出所) Тишков, глав. ред. [1994, 434-441].

表5 ロシア連邦の地方、州のロシア人（1989年）

		%			%
アルタイ地方	2,354,481	89.48	モスクワ市	7,963,246	89.72
クラスノダール地方	3,906,811	84.55	モスクワ州	6,212,471	93.47
クラスノヤルスク地方	2,660,542	87.56	ムルマンスク州	965,727	82.92
沿海地方	1,960,554	86.96	ニジェゴロド州	3,522,148	94.64
スタヴローポリ地方	2,024,068	83.97	ノヴゴロド州	711,740	94.70
ハバロフスク地方	1,558,958	86.04	ノヴォシビルスク州	2,556,934	92.02
アムール州	911,969	86.83	オムスク州	1,720,387	80.32
アルハンゲリスク州	1,446,210	92.13	オレンブルク州	1,568,442	72.26
アストラハン州	713,558	71.97	オルロフ州	861,901	96.95
ベルゴロド州	1,280,457	92.90	ベンザ州	1,296,163	86.15
ブリヤンスク州	1,410,960	95.98	ベルミ州	2,592,246	83.85
ヴラジーミル州	1,578,821	95.76	ブスコフ州	797,436	94.33
ヴォルゴグラード州	2,309,520	89.07	ロストフ州	3,844,309	89.56
ヴォログダ州	1,309,022	96.48	リャザン州	1,295,324	96.11
ヴォロネジ州	2,304,620	93.43	サマラ州	2,720,171	83.37
イヴァノヴォ州	1,258,026	95.77	サンクトペテルブルク市	4,448,884	89.14
イルクーツク州	2,499,460	88.45	サラトフ州	2,298,992	85.64
カリニングラード州	683,563	78.47	サハリン州	579,887	81.65
カルーガ州	998,443	93.82	スヴェルドロフ州	4,176,948	88.74
カムチャツカ州	382,423	81.03	スモレンスク州	1,085,161	94.07
ケメロヴォ州	2,870,125	90.51	タンボフ州	1,285,924	97.24
キーロフ州	1,531,679	90.42	トムスク州	883,767	88.23
コストロマ州	774,620	96.31	トゥーラ州	1,774,939	95.35
クルガン州	1,008,375	91.37	チュメン州	2,248,254	72.58
クルスク州	1,293,663	96.87	ウリアノフスク州	1,016,815	72.83
レニングラード州	1,502,901	90.88	チェリャビンスク州	2,929,507	80.98
リベツク州	1,198,051	97.39	チタ州	1,216,325	88.44
マガダン州	402,797	72.36			

(出所) Тишков. глав. ред. [1994, 434-441].

の広大な領土の多くも、非ロシア民族に民族的故郷として割り当てられている。すなわち、16の「共和国」、15のより低い水準の自治的民族構成体が、ロシア共和国領土の半分以上を占めているのである。名目上はロシア共和国ではあっても、ロシア人が少ししか代表されていないと不満をもち、ロシアにロシア人の比率の代表をというスローガンを掲げる者がいても不思議では

ないかもしれない。参考のために、地方、州のロシア人の人口と比率を、表5に掲げた。

第2節 連邦解体後の中央アジアのロシア人

1. 概 観

ロシア人と中央アジア諸民族との民族的な社会的・職業的差異は、旧ソ連の他の地域に比べ大きい。すなわち、原住諸民族の大きな部分は、伝統的な農業など第一次産業についているが、ここ十数年は、管理、教育、保健、裁判などの部門に、最近は商業、軽工業、サービスなどの部門に進出した。それに対して、ロシア人はあまり分野を広げず、1990年代には、重工業部門の労働者や技術者がいっそう増加した。ロシア人で教育、医療、裁判などのサービス部門や裁判官、民警、共和国の中央・地方の行政官として勤める者は減った。全体として農業に従事するロシア人は少なく、89年カザフスタンで17.7%、キルギスタンで6.8%とこの両国では若干いるが、ウズベキスタンは0.6%、タジキスタン0.7%、トルクメニスタン0.7%にすぎない⁽⁴⁾。これは表3にも反映されている。

ペレストロイカ以後の重工業企業の縮小と商業・金融などの発展は、ロシア人の働ける分野を減らすことになり、民族的軋轢を潜在させることになった。

また、ロシア人は言語面などの障害のため私企業をもちたいという欲求も少ない。女性の進出もイスラムの伝統の強いところでは困難があり、また学生のなかのロシア人の比率は、1960年代から80年代にかけてしだいに低下した。ロシアへの移住も青年層に多く、その結果ロシア人労働力は高齢化の傾向がある。

次に言語の問題であるが、ソヴェト期、ロシア語がソ連全体で使用された

ので、中央アジアのロシア人にとって名称民族の言語を学ぼうという刺激は小さく、実際修得した者はわずかであった。これは共和国によっては、現在も続いている。このため、例えばカザフスタンのロシア人でカザフ語を話せる者は、1989年0.9%にすぎなかった。カザフ語を修得する者が少ないという状況はドイツ人や朝鮮人の場合も同じである⁽⁵⁾。

連邦解体後、各国で名称民族の言語が公用語となった。ロシア語の扱いについては、国によって違いがある。カザフスタンでは1993年1月の独立後2回目の新憲法ではカザフ語を国家言語とし、ロシア語を民族間交流言語と定めている。94年7月にカザフスタンで行われた1169人についてのアンケート調査の、「あなたの子供に何語で専門教育・高等教育を受けさせるか」という項目では、ほぼ5割がロシア語でと答えている⁽⁶⁾。ここではカザフ人を含め、依然として、国際性のあるロシア語の修得意欲が強いのである。ウズベキスタンでは状況が違い、2000年を目標にローマ字化を進めており、ロシア語、ロシア文字は、急速に消されつつある。例えば、もとレーニン博物館であった歴史博物館の展示はウズベク語のみとなっており、しかもレーニンの写真は1枚もなかった。書店でもロシア語の出版物はわずかとなっている。

中央アジアのロシア人は、ウクライナ人、ドイツ人、タタール人、朝鮮人とは結婚したが、文化的に異なる名称諸民族との結婚はほとんどなかった。これはリトアニアやアルメニアに居住するロシア人と大きく違ったところである。ロシア人にロシア正教信者が多くムスリムと宗教や慣習が違うことも疎遠さの生まれる一因であろう。

連邦解体後の経済的な危機、失業、インフレ、特に都市住民の生活水準の低下のなかで、ロシア人のロシアへの大規模な移住が進んでいる。カザフスタンからはロシアへ1989～93年に55万人強、95年までに100万人以上が移住し、ウズベキスタンからは89～94年に43万人が移住した⁽⁷⁾。ただし、ロシアでも生活ができないため、相当数が戻ってきている。内戦のタジキスタンでは工業部門では63%がロシア人であったが、89～93年4月に38万8000人のスラブ系民族のうち30万人が脱出した⁽⁸⁾。

主な移住先は、ヨーロッパ・ロシア南部のクラスノダールやスタヴローポリ地方、中央ロシアのヴォロネジ、ベルゴロドの諸州、シベリア、ウラルなどであるが、再び戻る者も多い。大部分のロシア人は、居住地の政府やロシア政府による保護を望んでいる。アンケートなどによれば、ロシア人は、中央アジアの独立国になかなかアイデンティティを持たず、依然としてソ連にアイデンティティを求める者が多いようである。ロシア人の定着のためには、CISの一定の強化が有効のように思われる。またCISの存在がロシア人の地位の安定に役立つと考えられる。ロシアの経済の安定も必要である。

各共和国におけるロシア人自身の政治活動は活発ではないが、これはカザフスタン以外では永住に希望がもてないためでもあろう。

1994年の中央アジア5カ国の総人口の41.4%はウズベキスタンに、31.6%がカザフスタンに住み、この2カ国で73.0%を占めるが、経済的比重はもっと大きい。そして、この2カ国は、民族構成、経済的特徴、歴史的経験のかんりの面において対照的である。したがって、以下、この二つの国を中心とし、国別にロシア人の問題について検討したい。

2. カザフスタンとキルギスタン

(1) カザフスタン

1989年、中央アジア全体のロシア人の3分の2、620万人がこの共和国に住み、37.8%を占めた。

遊牧民であったカザフ人は1930年代の定住化、集団化政策によって大きい打撃を受け、26年と39年の統計を比べるとカザフスタン内では371万人から232万人へと37.3%も人口を減らした。30年代にカザフスタンのカザフ人は220万人、49%が失われたという数字もある⁽⁹⁾。そのあとに、大戦前から大戦期にかけて、ドイツ軍への協力を理由として自治共和国などを解散され追放された少数民族の強制移住地となって多民族性を強め、ソ連の100以上の民族のほとんどを含むことになった。また、カザフ人に対してロシア人の比

率が大きかった。カザフ人、ロシア人の比率は59年30.0%対42.7%，70年32.6%対42.4%，79年36.0%対40.8%としたいにカザフ人が増加し，89年39.7%対37.8%と逆転した。

1989年には620万人であったロシア人は，91年12月突然，他の独立国の住民になったわけであるが，多くのロシア人にとっては，それは単なる法的なフィクションであって，カザフスタン共産党中央委員会第一書記ナザルバエフを長とする共産主義者が政権にとどまっております，国家機関には本質的な変化はなにもないように思われた。ロシア人とカザフ人との関係に変化はないと考えようとしたのである。しかし，やがてカザフstanは国連に加盟し，ナザルバエフ大統領は92年4月に綱領的声明「2005年までのカザフstanの政治的・経済的発展の戦略」を提起し，カザフstanが自決権をもつカザフ民族の国家であるという理念を明確にした。人権は民族の権利に優越するとする知識人もいたが，ナザルバエフは，原住民族の権利は人権より上にあるという原則を固持した。93年初め，ナザルバエフの，カザフ民族の国家としてのカザフstanについてのテーゼが，憲法の前文で法的に確認されたのである。

このような条件のなかで，ロシア人は，社会的に認められた指導者や組織的な構造，知識人，大衆的な情報手段を欠き，カザフstanの民族間関係の根本的な変化に準備がなかった。

カザフstanは広く，地域によって民族構成が異なり，ロシア人などスラヴ系民族は，特に北部，北東部の7州で多い。これらの州では，工業従事者の67%がロシア人でカザフ人は11.4%にすぎない。カザフstan全体としては，工業従事者の52.6%，農業従事者の18.7%がロシア人で，カザフ人はそれぞれ22.4%，56.9%である⁽¹⁰⁾。

ロシア人が創設したスラヴ人の運動「ラード」，「ロシアの共同体」などは，北部や東北部の地域的な運動にとどまった。ロシアにはソルジュニーツィンのようにカザフstanの北部領土の要求もあった。ロシア人は，ドイツ人などとともにカザフ人への従属を望まず，その移住は，1993年，17万129人，

94年、28万3154人、95年、16万883人と推移し、再入国者を引いた移住者数は、それぞれ12万3777人、25万1934人、12万6468人となっている⁽¹¹⁾。結局独立の後これまでに100万人以上のロシア人と50万人以上のドイツ人が移住した。なお、カザフスタンには中央アジアの他の共和国からの移住も多い。93年の10カ月に15万4000人がカザフスタンに移住したが、うち5万4000人が中央アジアからであったという数字もある。全体として20%以上が、農村から都市へ、国外へ移住した。これは人口増加率減少のなかで行われたのである。さまざまな調査ではロシア人の80～90%がカザフスタンからの移住を望み、40～45%が近く具体化しようと努力しているが、ロシアによりよい移住先を見つめることができなかつたり、カザフスタンの土地を売ることができず、移住したのは、10～15%である⁽¹²⁾。別の調査では、将来ロシア人がカザフスタンから移住するであろうと答えた者はロシア人21%、カザフ人7%、カザフ語を修得してとどまるとした者それぞれ7%、42%、ロシア語ロシア文化を維持して生活するとした者36%、20%、カザフスタンがユーラシア連邦に入ると答えた者16%、15%などとなっている⁽¹³⁾。

1995年秋のアンケートでは、自分をカザフスタン国民と考えるロシア人は9.6%、ソヴェト国民と考えるロシア人27.1%、ロシア人の祖国はまずソ連とするもの41.7%、カザフスタンとするもの16.7%、生まれた場所をソ連とする者39.9%、カザフスタンとする者74.5%である⁽¹⁴⁾。

他方、カザフスタン政府は、主としてモンゴルからの50万人のカザフ人の移住を援助した。これらの地域のカザフ人の3分の1が移住したといわれている。多くは東北や中央部の諸州に移住したが、彼らは遊牧民でロシア語も話せず、この地域のロシア人に衝撃を与えた。

このようなロシア人やドイツ人の国外移住、一方におけるカザフ人の移住と人口自然増加率の相対的な高さによって、カザフ人の人口比率は急激に増大し、1989年の39.7%から94年には44.3%となった。現在はすでに半分を超えているものと思われる。

ロシア人は地域的な自治を要求し、1993年半ば以降は、二重国籍を要求し

たが、それはロシア内のカザフ人には与えていない扱いであった。カザフスタンはこの要求を拒否したが、国籍の選択は95年3月1日まで延ばされ、その後再び2000年まで延長された。またナザルバエフは、ロシア人の多い地域について言語法を再検討することに同意した。さらにロシアとカザフスタンは二重国籍の必要性を和らげるような相互的な協定に合意した。

工業就業人口は1991年の156万人から95年109万人へと約50万人急減し、3分の2となった⁽¹⁵⁾。これは、工業部門の縮小とロシア人の移住とが結合して起こったものと考えられるが、逆に言うと、工業生産の回復のためには、ロシア人のこれ以上の移住を止める必要があることも推定される。

この国について考える場合、第一に念頭におかねばならないのは、面積が広大で、ソヴェト期、図1に示したような、社会的・経済的潜在力が異なり、それぞれが他の地域に対して自給自足的な五つの地域が形成されたことである⁽¹⁶⁾。

それぞれ国境外の隣接する地域とつながりを持ち、民族構成も異なる五つの地域を統合し、カザフスタンとしての単一の国民経済を形成していくことが重要な課題である。しかし、場合によっては、カザフスタンとしての統一的な国民経済の形成ができないまま分解してしまう可能性もある。しかし、カザフスタンの場合、統一の追求とともに、ロシアを含めたより大きい領域のなかで考えていくことが特に必要であろう。カザフ人指導層には、ロシアとの連携、CISの強化を望む意見も強いようである。

ナザルバエフは、ロシア人がもっと政府に戻ることや、超国家的な行政機関を唱導しており、1994年6月にはユーラシア国家連合の結成を提案した。この国家連合では、構成国は名目的な主権を維持するが、実際の執行権は大統領会議に与えられ、その決定は構成国を拘束する。連合は共通の防衛政策、経済政策、単一の通貨をもつ。

キルギスタンはナザルバエフの提案を支持したが、ロシアは冷淡であったばかりでなく、1994年秋に、カザフスタンを含む他の国による鉱物や石油の開発契約に参加する権利を主張した。CIS諸国の国家的な統合が進まないな

かで、カザフスタンをいまだにロシアの一部とみる意識も強いのである。ロシアはテンギス油田のパイプラインの建設についてのオマーンとカザフスタンの取引に介入し、他のカザフスタンの会社の場合にもロシアの合併会社であるかのように相当の地位を得つつあると言われる。また、ロシア政府は通貨の採択を避けようとしていたカザフスタンに新通貨テンゲを導入せざるをえなくさせたが、それは95年に安定した。カザフスタンは、ナザルバエフ大統領の野心的な3段階の社会的・経済的移行プログラム実現のための資源をもっており、政府と行政機関は少なくともこの移行を実現するための法的・政治的枠組みの第1段階に着手している。

付 タタルスタンについて

ロシア連邦のタタルstanは、1989年、人口の48.5%をタタール人、43.5%をロシア人が占め、名称民族とロシア人の比率が近いという点でカザフスタンと似た民族構成となっており、中央アジアのロシア人の問題を考えるときの一つの参考として、ここに付け加えておきたい。

タタール人は中央アジアの大部分の民族と同じトルコ系イスラムの民族であるばかりでなく、中央アジアにも表1に見るように、クリミア・タタール人と合わせて117万9463人住み、タシケントには5万6940人、アルマトゥに2万3953人居住していた。ロシア内でロシア人に次ぐ3.8%（1989年）の人口をもつが、タタルスタンに住むのは、旧ソ連全土のタタール人の4分の1強にすぎない。

この民族は、ロシア革命の前と革命のなかで、中央アジアのトルコ系民族を結集する指導的民族として、独自の役割を果たした。商人として活動しつつ広く中央アジア諸民族を含むジャディディズムの運動を指導したこと、革命後、同じトルコ系ムスリムのバシキール人とともにタタール・バシキール共和国をつくろうとして、ソヴェト・ロシア指導者に抑えられたこと、沿ヴォルガや中央アジアのトルコ系諸民族の結集をはかって後に肅清されたタタール自治共和国首相スルタンガリエフのことはよく知られている。中東のイ

スラム諸国との社会的・文化的つながりも深く、地理的にもユーラシア大陸の中央部に国をもち、今後スラヴ系とトルコ系両民族集団、ロシア正教とイスラムという二つの大宗教、より大きく言えば、ヨーロッパとアジアをつなぐ立場にある。

1997年8月、主権宣言7周年のタタルスタンの首都カザンを訪れて感じたのは、ロシアの影響の強さという点でのカザフスタンとの大きな違いであった。

この違いは、カザフスタンがロシアに服したのが18、19世紀であるのに対し、タタルスタンは16世紀イヴァン雷帝に征服され、カザンがクレムリンを中心とした都市につくりかえられたというロシア支配の長さの違いによるものであろう。

もう一つの理由は、タタルスタンはロシア連邦内の自治共和国の地位にあり、ソヴェト時代においても、1936年以来連邦構成共和国であるカザフスタンより、自立性が低かったことであらう。

タタルスタンは、1992年3月31日のロシア連邦条約には、その直前3月21日に行った「ロシアと対等な主権国家」の地位を問う国民投票で、投票率81.6%の61.4%の支持を得たことをふまえ、チェチェン・イングーシとともに調印しなかった。

これより先、1990年8月30日、ヴォルガ・ウラル地域の自治共和国の先頭をきって主権宣言を行い、91年6月にはロシアと同時の大統領選挙で共産党地方委員会第一書記のシャイミエフを当選させた。エリツィンが大勝したロシア大統領選挙へのこの地方の投票率は3分の1にすぎなかった。経済改革においても、「ショック療法」はとらず、独自の「社会的市場経済」をめざしている。

1994年2月15日に、資源の利用や外国との関係について、連邦条約よりはるかに大きい権限を認められた権限区分条約を調印し、ロシア連邦に加わった。

現在学校ではロシア語とともにタタール語が必修で、憲法でロシア語とと

もにタタール語が公用語とされている。政教分離の原則はしっかりと守られている。

(2) キルギスタン

キルギスタンは政治の民主化、市場経済化では先頭に立っているかにみえる。しかし、生活水準は下降し、最低生活費が月45ドルであるのに住民の4分の1は7ドルの最低賃金より少ない収入しか得ていない。特に子供の死亡率が上がり、平均寿命が短くなっている。

キルギスタンから3年間に約25万人のロシア人が移住した。ロシア人をはじめとする民族的少数派は人口の42%を占めるが、立法機関には17%しか代表されていない。ビシケクの20以上の民族・文化センター、キルギスタン人民（民族でなく）総会、キルギス・ロシア（スラブ）大学、1994年6月14日の大統領令「移住過程の統制について」、この命令実現のための94年9月1日の政府決定662号など民族融和のために多くの措置がとられた⁽¹⁷⁾。

キルギスタン人民総会は、文化センターやキルギス人民を結合する代表制の大衆組織である。民族的少数派の権利の根本問題を、総会は解決できず、その提案は勧告にすぎなくなっている。

大統領令と政府決定が出された後、国家行政機関に少数民族を入れるための方策が3カ月間検討されたが実らなかった。1年半後政府決定の成果は報告されていない。ロシア人は、国家機関には全部で地方行政の代表者2人だけで、州の行政機関には1人もいない。州検事局に1人、すべての州の裁判機関でも同様である。州の民警にも1人もいない。

第2回クルルタイ大会でアカエフ大統領が希望したロシア語の問題、1994年6月14日の大統領令は多くの点で遂行されず、実際には民族国家が建設されつつある。

とはいえ、ロシア人に対するキルギス人の態度は、敵意のあるものではない。むしろキルギス人はロシア人とロシア文化に対して敬意をもっている。モスクワに住むキルギス人への手紙で、キルギス女性は、「ロシア人のいる

ところには、真実がある」と語っている。改革派の1人は、ロシア語について次のような感想を述べている。「キルギス語の知識なしには、わが民族の息子という権利はない。しかし、ロシア語の深い知識なしには、完全な人間と考えることはできない。」⁽¹⁸⁾

ロシアは、1世紀にわたってキルギスタンの言語、文化、政治の発展の基準であった。この心理的従属が部分的にキルギス・ナショナリズムの源泉であったが、それはまた、ロシア人とキルギス人を拘束した。

ウズベク人に対するキルギス人の態度はよりアンビバレントである。キルギス人はトルコ系でムスリムであるという点ではウズベク人と共通であるが、汎トルコ、汎イスラム的な統一の呼びかけには懐疑的であった。そのような運動では、中央アジアでより大きく、歴史的伝統をもつウズベク人のヘゲモニーをもたらす恐れがあったからである。ウズベク化に対するキルギス人の恐れを示す証拠として、ウズベキスタンのアンジジャン地区で自称キルギス人が1906年の10万7000人から89年に7万2900人に減ったことを指摘した91年の論文があることが紹介されている⁽¹⁹⁾。キルギス人にとってウズベク化はロシア化より油断のならないことのようにみえた。

ロシア化は言語と文化に、ウズベク化は民族的アイデンティティそのものにかかわっている。

この国では、カザフスタンと同じくイスラムはあまり強くない。1993年のキルギス人の二つの村の73人のアンケート調査によれば、自分をムスリムと考えるものは74.0%であるが、キルギスタンがイスラム国家になることを望むものは6.8%で、否と答えたものが76.7%、特に女性は83.3%である⁽²⁰⁾。

3. ウズベキスタンとその他の2カ国

(1) ウズベキスタン

ウズベキスタンはウズベク人が8割以上で、カザフスタンよりイスラムとその慣習が強い。面積の37%を占めるカラカルパク共和国は、自然条件でも

民族的にもカザフスタンに近く、1925～30年自治州としてカザフスタンに属していたが、カラカルパク人は2.1%にすぎない。

ウズベキスタンは1国で中央アジア5カ国の人口の41.4%（1994年）を占める。経済的な比重はもっと大きく、首都タシケントには革命前トルケスタン総督府がおかれ、ロシアの中央アジア支配の拠点であった。ロシア人鉄道労働者も集中しており、兵士も駐屯していた。タシケントのソヴェト政権はこれらのロシア人が中心となって樹立し、ムスリムの形成したコーカンド自治体は1918年2月に倒された。5月にはタシケントを首都としてトルケスタン自治共和国が発足する。ウズベク共和国は、これに2ハン国の領域を含めた地域の24年の民族的境界区分によって、中央アジアの中心部分に形成されたものである。

1920年代半ば、ソヴェト政権はカードル（要員）の「コレニザーツィア」（原住民族化）を推進した。この政策の動機は、行政が地方住民の支持を得るため、地方の利益の体现を自覚する指導者を育てることであった。ウズベキスタンでは、この政策は28年までに「ウズベキザツィア」と同一視され、ウズベク人が特権的な地位を占めるようになった。

綿花は中央アジア灌漑農業地帯の主な生産物であり、経済の基礎をなしている。なかでもウズベキスタンは旧ソ連の生産の6割を占めていた。この地域は灌漑による水と日照が十分にあって、綿作に適した自然条件をもっており、十月革命前、ロシアは需要の半分をアメリカからの輸入に、残りの半分をこの地域に依存していたが、革命後ソ連は、一国社会主義建設による工業化の方針の下に、綿作面積をいっそう拡大、1932年には輸入を必要としなくなり、やがて世界1、2の綿花生産国となり、ロシア経済にいっそう強く組み込まれた。

ウズベキスタンなどでは、1920年代後半に土地・水利改革が行われてバイ（地主）の支配が一扫されたが、そのなかで識字運動や文化的改革、女性解放などの社会的改革も進んだ。他の共和国と同じく、20年代末にラテン文字が採用されたが30年代末にロシア文字に基づくものに変えられた。行政や司法、

教育からイスラムの支配が排除され、ソヴェトの機関がとってかわった。続いて30年代前半、農業集団化が行われたが、そのさい工業原料である綿花の買付価格は高く定められるなど綿作の奨励策と結びつけられたため、この期間も他の農業地帯とは違って生産が一貫して増大した。すなわち、ロシア・ソ連の綿花生産は、1913年の74万トンから、28年からの第1次5カ年計画期には年平均104万トン、59年468万トン、80年910万トンと飛躍的に増大している。綿花の収穫などの機械化も進められたが、まだ充分でなく、農繁期に少年労働が投入されていることも指摘されている。またソヴェト時代に綿の生産が10倍以上に増やされたので、ソヴェト・モノカルチャーという批判もあびた。もっとも、自然条件にあった農業生産を基礎として工業化を行い、分業の一環を担うことは、それが住民の生活水準の向上をもたらす場合には、いちがいに責められることではない。工業化にともなって、都市に大量に移住したロシア人は、ウズベキスタン工業の主な担い手となった。

綿花栽培のための灌漑溝の開発とアムダリア、シルダリアの非効率的な水の利用によってアラル海が干上がり、その影響はウズベキスタンばかりでなくカザフスタンにも広がっている。また綿の増産のために化学肥料や農業を大量に使用したため、土地が汚染され、環境が悪化し、チェルノブイリとともにCISの二大公害の一つとなっている。よく知られているように、ソヴェト時代、カザフスタンに源流をもつイルティシ川などの水をダムでせき止め、アラル海に流し込む計画もあったが、シベリアの環境への影響などが大きいとして科学者や住民が反対し、ペレストロイカの時期に中止された。

工業は革命前綿花精製と綿実油の搾油しかなかったが、ソヴェト期紡績や織物工業の他、機械製作、金属加工、食料品などの部門の建設、天然ガスの開発がすすみ、綿花関連部門の比重は著しく下がった。とはいっても、綿工業は投資効率の面からモスクワ周辺の工場の拡大に重点がおかれ、織物工業はウズベキスタン住民の衣料の需要さえ満たしていなかったもので、現在拡大されつつある。これはウズベキスタンがCIS諸国のなかで、工業生産の落ちこみが少なかった唯一の国である理由である。

ソヴェト政権期の経済建設は、大筋において今日も評価されているようである。それは1959年から83年の死まで20年以上ウズベキスタン共産党第一書記として働き、その間にしだいにロシアからの自立性を強めていったラシドフが、死後の86年にネポティズムを非難されたが、独立後名誉回復されていることにも表れている。ここには、60～62年と64年以降カザフスタンの党第一書記をつとめたクナーエフが86年更迭されたときの抗議運動に表れたものと共通の、ロシアの中央党指導部に対する反感があるように思われる。これはかならずしも、共産党に対する批判と同じではない。ウズベキスタンの場合、ソヴェト期からの指導者が、実質的に一党制を守り、市場経済を導入して経済開発を継続しようとしており、中国と共通するところがある。そのさい、ロシアに対するナショナリズムを民族統合の一つの梃子としているようである。

独立後1992年7月28日にウズベキスタン国民法が採択されたが、それによって民族、社会的地位、人種、性、教育、言語、政治的見解にかかわらず領土内に住むすべての個人に国籍の取得が許された。二重国籍は排除される。

ソヴェト期にはロシア語に対し、ウズベク語は第2の地位にあったが、カリモフはこれを逆転した。ウズベキスタンでは全体として三つの言語グループがある。一つはトルコ系言語、二つめはイラン語系（タジク語）、三つめはその他すべてのグループでロシア語が含まれる。政府はウズベク語を重視し、1989年末の公用語についての法律によってウズベク語への移行が速められ、一挙に多数派の言語となった。92年9月ウズベク国家情報局総裁は、93年1月1日からウズベク語だけで情報を出すと声明し、ロシア語の道路標識はたちまちなくなり、ロシア語人口の多いタシケントといくつかの地域でだけ残された。ロシア語を話す者は、旧「占領者」や「植民者」とみなされることがあり、若干のウズベク人は、ロシア人は去るか、彼らがウズベキスタンで行ったことを償うべきであるという感情をもっている。特に子供たちの将来を恐れるロシア人など非ウズベク人はウズベキスタンを離れた。89年にウズ

ベキスタンのロシア人は165万4000人であったが、94年までに43万人が移住した⁽²¹⁾。ロシア人の3分の2がロシアへの移住を望んでいるという調査もある。工業労働者は依然としてロシア人が多いので、ウズベク人の都市、工場へのいっそうの進出が必要であろう。90年に、この移住の流れが逆転されなければ、中央アジアの技術的に進んだ生産部門は2、3年のうちに「技術的専門家の破滅的な不足」となると警告するアナリストもいた。しかしそうした事態にはならなかったのはおそらく、多くのロシア人や非ウズベク人グループが、ウズベキスタンにとどまったからであろう。ここでは人口の1%弱の朝鮮人の活躍も目立っている。これに関連して、韓国の経済的進出も著しい。

ウズベキスタンのロシア人の政治組織として、1989年にウズベク人の「ビルリク」の運動の成長への反動として、インテルソユーズが創設されたが、92年には事実上消滅した。

ロシア人の大量移住にもかかわらず、ウズベク人の自然増加率が高いためウズベキスタンの総人口は、1989年の1990万5000人から95年の2256万3000人へと6年間に265万8000人も増加した。増加した住民に食糧を確保するため、政府は綿花の栽培面積を減らし、穀物生産を増大してその自給をはかっているが、これは中央アジア共通の傾向である。しかし、綿花は依然としてロシアへの主要輸出品であって、生産を大幅に減らすことはできない。

(2) トルクメニスタン

1989年の人口調査では、トルクメン人は72.0%、ロシア人9.5%、ウズベク人9.0%であるが、ロシア人は59年の17.3%から一貫して減少している。ウズベキスタン、タジキスタンと同じく農業に従事するロシア人はわずかで、97%が都市に住み、大部分が石油、天然ガスの採掘部門で働いている。他方、工業に従事するトルクメン人は6%に満たない⁽²²⁾。ロシア人の現状についての情報はないが、ウズベキスタンより悪いようである。

ここではソヴェト政権の創設と同時に、トルクメン人のカードルたちがロ

シア語を学ぶ機会をもつようさまざまな手段がとられた。1930年代と40年代にはトルクメン語を学ぼうという意欲が弱まり、その結果として、都市のインテリゲンツィアの間でのトルクメン語の影響は弱い。大臣会議や指導的な機関でのトルクメン語の使用はほとんどなくなった。他方、農村住民にはロシア化はほとんど浸透しなかった。79年の人口調査は住民の約4分の1がロシア語を話せることを示しているが、その大部分は都市の住民であった。この15年ロシア語の話せる者は減った。若い住民は基本的にロシア語を知らない。全体としてはトルクメン語の保持率が高い。90年5月、数カ月にわたる討論の後、トルクメン語をロシア語と対等とする言語法を採択した。

1991年の八月政変は、トルクメニスタンの国内状況を基本的には変えなかった。共産党は民主党と改称し、第一書記のニアゾフが大統領となった。現在トルクメン語とイスラムを梃子として、部族主義と「社会主義」の克服をはかろうとしている。

CISのなかでは独立の立場を守ろうとし、例えば1994年10月の経済委員会の設置や共同防衛の文書には1カ国だけ調印しなかった。ただしロシアとは、95年5月に二国間の経済協力協定と軍事協定を結んだ。CIS諸国との貿易は縮小し、ドイツをはじめとするEU諸国との貿易の比重が大きくなっている。CIS諸国のなかでは経済活動の低下が最も少なかったが、94年頃から沈滞し96年を底として若干上向いている。天然ガス、石油などの分野での新投資が必要である。

アメリカは1997年7月、トルクメニスタンからトルコまで天然ガスを輸送するためにイラン国内を通るパイプラインの建設に反対しないと声明したが、カスピ海の石油、天然ガスがロシアを経ないで欧米に輸出されるようになれば、中央アジアとロシアとの関係、中央アジアにおけるロシア人の地位に大きな変化が起きる可能性がある⁽²³⁾。

(3) タジキスタン

この国の民族構成の特徴は、タジク人317万3000人(1989年)62.3%に次い

でウズベク人が119万7000人23.5%を占めることである。中央アジア唯一のイラン系のタジク人はトルコ系のウズベク人とはしばしば対立があり、またウズベキスタン政府はタジキスタンの動きに同調していない。

ロシア人は38万7000人7.6%と少ないが、ソヴェト時代にはウズベク人より大きい影響力をもっていた。工業で6割以上を占めたばかりでなく、他の農業以外の多くの分野で専門性の高い仕事につき、ロシア語で活動した。しかし、1994年には7万～12万人となったと推定されており、さらに急激に減少しつつある⁽²⁴⁾。これは、89年にタジク語が国家語となったこと、教育に不安があること、生活水準が低いこと、民族的不安があること、内戦のため治安が悪いこと、などのためである。このようにロシア人は激減したが、ドイツ人も89～92年に2万3648人が国外へ移住した。これは89年在住者の72.4%である。ユダヤ人も93年初めまでに21.2%となった⁽²⁵⁾。89～94年にタジキスタンを脱出した住民は、全部で68～69万人である⁽²⁶⁾。

しかし、タジキスタンへのロシア政府、軍の関与は逆に大きくなった。経済は現在崩壊状態にあり、借款、財政補助、通貨の投入によって、モスクワはドシャンベ政権を積極的に支持している。モスクワが短命の連立政権に供給を拒んだ資材も、その後継政府に与えられ、自身の軍隊創設を助けた。1996年、二国間の新しい経済協定が結ばれたが、これによってロシア・ルーブルがタジキスタンの通貨・支払い手段となった。貿易もCIS諸国の比重が大きい。

第20自動車ライフル軍団と辺境守備隊などのロシアの軍事力は、タジキスタン最大の軍隊で、1995年までに約2万3500人を数えた。ロシア軍将校によって率いられるCIS合同平和部隊に、ウズベキスタン、キルギスタン、カザフスタンも若干の兵力を送っている。ロシア軍はタジキスタン内の鎮圧作戦に参加し、作戦指導を行った。ロシア軍はまたアフガニスタンを基地とする亡命者の越境攻撃とも戦った。

- 注(1) Голикова и др. [1972, 63, 100]
 (2) Арутюнян и др. ред. [1992, 100, 113], Лебедева [1995, 37, 40].
 (3) Кабузан [1996, 291].
 (4) Арутюнян и др. ред. [1992, 100, 113]
 (5) Брусина и Митина [1996, 9].
 (6) Аренев и Калмыков [1995, 6]
 (7) Тишков ред. [1996, 183, 209].
 (8) Там же [185, 194].
 (9) Абдакимов [1994, 119].
 (10) Брусина и Митина [1996, 6].
 (11) Институт этнологии и антропологии РАН [1996, 40].
 (12) Там же.
 (13) Тишков ред. [1996, 209]
 (14) Институт этнологии и антропологии РАН [1996, 41].
 (15) 岩崎 [1997, 181].
 (16) 木村 [1996, 8-12].
 (17) Институт этнологии и антропологии РАН [1996, 50].
 (18) Bremmer & Tater eds. [1997, 664].
 (19) *ibid.*
 (20) Космарская и др. ред. [1994, 53].
 (21) Тишков ред. [1994, 183].
 (22) Там же [184].
 (23) 出羽 [1997, 32].
 (24) Bremmer & Tater eds. [1997, 609].
 (25) Бушков и др. [1995, 56-57].
 (26) Тишков ред. [1996, 194].

〈参考文献〉

〈ロシア語〉

- (1) Абдакимов, А. [1994] *История Казахстана*, Алматы.
 (2) Аренев, М. и Калмыков, С. [1995] “Современная языковая ситуация в Республике Казахстан,” *Евразийское сообщество*, No.3.
 (3) Арутюнян, Ю. В. и др. ред. [1992] *Русские, этно-социологические очерки*, Москва.
 (4) Брусина, О. И. и Митина, Д. А. [1996] *Этнические Фактор в современном социалино-политическом развитии Казахстана*. (исследования по

- прикладной и неотложной этнологии, Документ No.94), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.
- (5) Бушков, В. И. и др. [1995] *"Таджикская революция" и гражданская война (1989-1994 гг.)*, Москва.
 - (6) Голикова, З. и др. [1972] *Компартия Казахстана за 50 лет*, Алма-Ата.
 - (7) Игрицкий, Ю. И. и др. ред. [1996] *Россия и ее соседи*, Москва.
 - (8) Институт этнологии и антропологии РАН
 - [1993 a] *Российский этнограф* 1, Москва.
 - [1993 b] *Российский этнограф* 2, Москва.
 - [1993 c] *Российский этнограф* 3, Москва.
 - [1993 d] *Российский этнограф* 20, Москва.
 - (9) Институт этнологии и антропологии РАН [1996], *Бюлетень* No.9. май.
 - (10) Кабузан, В. [1996] *Русские в мире*, С-Петербург.
 - (11) Космарская, Н. П. и др. ред. [1994] *Этносоциальные процессы в Кыргызстане*, Москва.
 - (12) Котов, А. [1995] "Единое гражданство-Конституционная основа равноправия в Республике Казахстан," *Саясат*, No.3, август.
 - (13) Кульчик, Ю. Г. [1995] *Республика Узбекистан в середине 90-годов* (Исследования по прикладной и неотложной этнологии, Документ N.90), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.
 - (14) Лебедева, Н. М. [1995] *Новая русская диаспора*, Москва.
 - (15) Малькова, В. К. [1993] *Проблемы русской диаспоры с ближнем российском зарубежье* (Исследования по прикладной и неотложной этнологии, Документ No.36), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.
 - (16) Савоскул, С. С. и др. ред. [1995] *Русские в новом зарубежье: Киргизия* Москва.
 - (17) Скопин, А. [1995] "Миграционные процессы в Казахстане, прошлое, настоящее, будущее," *Евразийское сообщество*, No.6-7.
 - (18) Тишков, В. А. [1993] *Русские в Средней Азии и Казахстане* (Исследования по прикладной и неотложной этнологии, Документ No.51), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.
 - (19) Тишков, В. А. отв. ред. [1993] *Современная общественно-политическая ситуация в Средней Азии и Казахстане* (Исследования по прикладной и неотложной этнологии, Документ No.50), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.

- (20) Тишков В. А. глав. ред. [1994] *Народы России, энциклопедия*, Москва.
- (21) Тишков В. А. ред. [1996] *Миграции и новые диаспоры в постсоветских государствах*, Москва.
- 〈英語〉
- (22) Akiner, S. [1995] *The Formation of Kazakh Identity: From Tribe to Nation-State*, London: Royal Institute of International Affairs.
- (23) Askarov, T. [1995] "Pattern of Population Movement in Kazakhstan," *Focus Central Asia*, No. 9, May 15.
- (24) Bremmer, I., Tater, R. ed. [1997] *New States, New Politics: Building the Post-Soviet Nations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (25) Brubaker, R. [1996] *Nationalism, Reframed, Nationhood and the National Question in the New Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (26) Critchlow, J. [1991] *Nationalism in Uzbekistan: A Soviet Republic's Road to Sovereignty*, Boulder: Westview Press.
- (27) Howell, J. [1996] "Poverty and Transition in Kyrgyzstan: How Some Households Cope," *Central Asian Survey*, No. 15.
- (28) Minahan, J. [1996] *Nation without States: A Historical Dictionary of Contemporary National Movements*, Westport (Conn.): Greenwood Press.
- 〈日本語〉
- (29) 岩崎一郎 [1997] 「体制移行期におけるロシア・中央アジア諸国分業関係の経路依存性: 試論」(『スラブ研究』No.44)。
- (30) 宇山智彦 [1996] 「カザフスタンの権威主義体制」(『ロシア研究』No.23)。
- (31) ——— [1997] 「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観」(『スラブ研究』No.44)。
- (32) 木村英亮 [1993] 『スターリン民族政策の研究』有信堂。
- (33) ——— [1996] 「カザフスタン独立国家形成の前提について」(清水 学・松島吉洋編『中央アジアの市場経済化——カザフスタンを中心に』アジア経済研究所)。
- (34) 小松久男 [1996] 『革命の中央アジア』東京大学出版会。
- (35) 出羽 弘 「カスピ海石油をめぐる騒動の背後にあるもの」(『ロシア・ユーラシア経済調査資料』No.784)。

参考文献, および注記は最小限とし, タタールスタンについては省いた。
 カザフスタンについては, 木村 [1996] の参考文献を参照。